丁寧文体－新聞の読者投稿文の分析

高　橋　敬　一

1、はじめに

文章に個性（文体）が生じるのは、何故であろうか。

文章を書くとき、いろいろな場面で選択を迫られる。たとえば、最初に文体の選択をしなければならない。文語文体にするか、あるいは口語文体にするか。口語文体にする場合には、「です・ます」文体（以下、「丁寧文体」と呼ぶ）にするか、それとも「だ・である」文体（以下、「普通文体」と呼ぶ）にするかなどいろいろな選択をしながら文章を書くのである。その他、用語（語彙）の選択（たとえば、いわゆる和語にするか、外来語にするかなど）なども重要な選択であることを経験上知っている。

文章というのは、このようないくつかの選択を経たものであり、その選択の中、文体・用語などのように、常に選択を必要とするものがあり、その選択の仕方（用法）によって個性（文体）が生まれるのだと考えられる。

現代日本語の文章表現法の基本としては、実際には丁寧文体という文体様式を用いることはあまりない。つまり、丁寧文体を用いるのは、特定の人を読者として想定する場合のみであり、一般的には、文章は不特定の人物を対象にするために普通文体を用いるのが原則である。従って、手紙や案内状などは丁寧文体で書き、小説やエッセイ、小論文などは普通文体で書くのが一般的である。しかしながら、これはあくまでも、原則であって、不特定多数の読者を念頭において書くエッセイなどでは、内容などによっては丁寧文体を用いることがある。

最近、「毎日新聞」の読者の投稿欄「みんなの広場」を読んでいると、普通文体の投稿の中に、丁寧文体の投稿が混じっていることがある。普通文体を基本としている紙面の中で、ある種の違和感を感じることがある。

丁寧文体の投稿者は、どのようなルールに従って、あるいは表現効果をねらって、そのような文体様式を選択するのであろうか。

本稿は、日本語の語法研究の試みの一つとして、丁寧文体には、それを話題（話題主に対する敬意・感謝の気持ちなどを含む）として取り上げることについての畏敬の念を含むもの（いわゆる話し言葉における「尊敬表現」・「謙譲表現」と共通する面があるもの）と、読者に対する配慮を含むもの（「いわゆる話し言葉における「丁寧表現」といわれるもの）との二種類があることを中心に、丁寧文体について考えてみようとするものである。

2、丁寧文体とは

金田一春彦氏は、論文「不変化助動詞の本質－主観的表現と客観的表現の別について－」（「国語国文」第22巻2・3号　1953年）の中で、「です」・「ます」および丁寧文体について、次のように述べておられる。

私は「です」も「ます」も、丁寧の意味の助動詞とも考えないし、聞手に対する敬意を表わす助動詞とも考えないのである。（略）私は、「です」「ます」には、他の助動詞にたえて見られない、著しい特色があるのを見逃がし得ないと思う。それは、いくつかのセンテンスからなる文章において、最初のセンテンスの文末その他に「です」か「ます」を用いたら、最後までそう言った類の表現で押し通すようになっているという事実である。（略）つまり、日本語の文体には、口語体と文語体とがあるが、口語体の中にまた文体が分かれていて、その一つが、「だ」体であり、もう一つが「です・ます体」だ、と解すべきだと思う。（略）「です・ます」体は、社交的な場面に用いられる文体である。そしてその文体に用いられる、「だ」に当る助動詞が「です」であり、「起きる」に当る動詞が「起きます」である。

この論文が発表されてから既に50年以上経過しているのであるが、そこ

で述べられている氏の見解・指摘は斬新であり、現代においても興味深く、充分魅力的なものである。氏が指摘なさったことを筆者なりにまとめ直してみると、氏は、「です」・「ます」について、それぞれ「です」は、＜（指定・断定の意味を持つ）助動詞＞、「ます」は、＜動詞の活用語尾（動詞の「ます」形は、指定・断定の意味を持つ）＞であり、その機能はともに「社交的な場面」で用いられることによって発揮されるというのである。確かに、「です・ます」文体をイコール丁寧文体と呼ぶことについては、問題があるように思われる。しかしながら、現代における「です」「ます」の用法をみると、「だ・である」文体に対立する文体として「です・ます」文体が確立していると認識されており、その用いられる場面がどちらも「社交的な場面」であり、家族間・友人間で用いることに抵抗感が生じるという現状があることなどを考えあわせて、本稿では「です・ます」文体を丁寧文体として論を進めていくことにする。

3、丁寧文体に対する意見

文章表現上における丁寧文体の特徴（効用）について考えてみたいと思う。丁寧文体には、効用という面からみるとプラス面とマイナス面があるようである。そのプラス面を積極的に評価しようとする立場と従来通りに消極的に捉えようとする立場がある。まず、前者の立場の人の意見には、次のようなものがある。

> デス・マス体の方がやさしいのは、書き手が読み手を大いに意識して、自分の場に引き込むところがあるからでしょう。別のことばでいえば臨場感が大いに出てくる、といえます。特に日本語は場面依存的な言語ですから、このように場面に引き込めばそれだけ有利になるはずです。手紙の文体が今デス・マス体を主流としているのはこのゆえです。（野元菊雄『広告に見る時代のことば大研究』　1983年）

「です・ます体」は「である体」よりもあたりがやわらかく、従って

日常的テーマに向くと思われるかもしれませんが、逆ではないでしょうか。エッセイと総称される文章には評論や論説がありますが、これらを「です・ます体」で書くと、読者がカチンとこないように、やわらかく自己主張することが可能になるのです。ただし、あたりのやわらかさが逆効果になる場合も大いにありえます。（木村治美『エッセイを書きたいあなたに』　1987年）

「です」「ます」調は押しつける感じもなく、柔らかな雰囲気が出る。この特色を生かして、昔から女性を主人公にした小説にも度々用いられてきた。（村田喜代子『名文を書かない文章講座』　2000年）

敬体（「です・ます」体）はへりくだった感じを読み手に与えることができる。敬体というのは、文字どおり、読み手に対して敬意を示す文体だ。敬体を用いると、婉曲になり、態度が和らぐ。したがって、謙虚で丁寧な印象を与えたいときには敬体を用いるといいだろう。だが、もう一つ、敬体には特徴がある。それは、しみじみした情感を出すのに適している、ということだ。（樋口裕一著『人の心を動かす文章術』2004年）

一方、文章表現上における丁寧文体のプラス面は認めながらも、一般の人がこの様式を用いることについてはどちらかと言うと、消極的な立場をとっている人の意見には、次のようなものがある。

「です・ます」調は、どうしても文章がながくなりがちだし、よほどの名手が上手に使わないと冗漫な感じの文章になってしまう。うっかりすると慇懃無礼にもなりかねない。薄気味悪い「です・ます」があるじゃないか。「豆腐がとてもおいしかったです。」なんていう珍妙なのにも、しばしばお目にかかる。（轡田隆史『うまい！と言われる文章の技術』

1998年）

（「です」「ます」調は押しつける感じもなく、柔らかな雰囲気が出る。この特色を生かして、昔から女性を主人公にした小説にも度々用いられてきた。）しかし小説の場合、柔らかな雰囲気が作為のあざとさをあらわに出す場合もあるから注意したほうがいい。これがエッセイや投稿文になると嫌味にならない代わりに、普段使いの言葉と近いぶんだけ内容もゆるみがちになる。（村田喜代子著『名文を書かない文章講座』　2000年）

以上、文章家五名の考える文章表現上における丁寧文体の特徴（効用）として、プラス面、マイナス面それぞれまとめてみると、次のようになる。

（プラス評価）

・「優しく読者を引き込む」文体（広告文・手紙　野元氏）
・「臨場感が出てくる」文体（広告文・手紙　野元氏）
・「あたりが柔らかい」文体（エッセイ　木村氏）
・「柔らかく自己主張が可能な」文体（エッセイ　木村氏）
・「押しつける感じがない」文体（小説　村田氏）
・「柔らかな雰囲気が出る」文体（小説　村田氏）
・「謙虚で丁寧な印象を与える」文体（エッセイ　樋口氏）
・「婉曲で態度が和らぐ」文体（エッセイ　樋口氏）
・「しみじみとした感情が出る」文体（エッセイ　樋口氏）

（マイナス評価）

・「冗漫な感じを与える」文体（エッセイ　轡田氏）
・「慇懃無礼な」文体（エッセイ　轡田氏）
・「作為のあざとさがあらわになる」文体（小説　村田氏）
・「内容がゆるみがちになる」文体（エッセイ・投稿文　村田氏）

4、分　析（1）

「毎日新聞」の「みんなの広場」（2005年12月掲載分　115編）を資料にして、新聞の読者投稿文における丁寧文体について分析し考察してみたいと思う。

まず、投稿文115編を投稿者の性別および投稿者の年代別（10代は「中学生」「高校生」」に分けた）に分類した上で、丁寧文体と普通文体に分けたものが次表である。尚、丁寧文体と普通文体に分ける基準は、地の文の文体によった。すなわち、地の文が「です・ます」文体のものを丁寧文体とし、「だ・である」文体のものを普通文体とした。そのために、両文体の混合したもの（地の文は普通文体で、会話文のみを丁寧文体にしているもの）８編については、普通文体の中に含めた。また、普通文体の中には、話末文のみを丁寧文体の願望文（「・・・お願い致します。」）で締め括っている１編も含まれている。

	女性		男性		合計
	普通文体	丁寧文体	普通文体	丁寧文体	
中学生	3	2	0	2	7
高校生	3	4	0	0	7
２０代	0	1	1	0	2
３０代	6	0	2	1	9
４０代	3	1	6	1	１１
５０代	8	3	１０	2	２３
６０代	6	6	9	5	２６
７０代	5	3	１３	1	２２
８０代	3	2	3	0	8
合　計	３７	２２	４４	１２	１１５

この表を、新聞の投稿文に丁寧文体が出現する可能性が高いのは、どのような場合かという視点で分析してみる。まず、投稿者の性別をみると、

女性投稿者59名、男性投稿者56名の中、それぞれ丁寧文体の占める割合は、女性が約37パーセント（22名）で、男性は約21パーセント（12名）である。話し言葉における丁寧文体の出現状況を考えると、女性の方が当然多いであろうと予想していたが、それほど大きな差は出なかった。

次に、投稿者の年代をみると、女性・男性ともに、10代（中学生・高校生）および60代に丁寧文体の投稿がわずかに多いようであるが、これも他の年代と大きな差があるようには思われない。いずれにしても丁寧文体を選択する理由は、性別・年齢と特に相関関係があるようには思われない。

5、分　析（2）

金田一氏は、前述の論文の中で、丁寧文体で文章を書くか、普通文体で書くかという文体の選択について、書き出し（冒頭文）の段階で決定されることを、次のように述べておられる。

> 「です」や「ます」を用いた文章には、特に「です」体とか「です・ます体」とかいう文体としての名称がついているほどである。これは重要なことだと思う。これは何を表わすか。これは、「日本語」と言うラングの中に、≪文語体≫という文体があって、いわゆる≪口語体≫に対立している事実を思い起こさしめるものだと思う。私たちは、文章を書く場合、第一のセンテンスを文語体で、「・・・なり」ととめたら、以下の文章もすべてこれに準じて文語式な表現をしなければならないことになっている。「です」「ます」の性格は正にこの事実を思い起こさせるものと思う。

ここでは、丁寧文体の投稿32編（冒頭文が体言止めの文の２編を除いている）の冒頭文を分析して、丁寧文体の特徴およびそれを採用する理由などについて考えてみたいと思う。尚、新聞投稿文の冒頭文には、エッセイであるから、主語は「私・身内」であるものが多い（18編、以下、自称詞

主語文と呼ぶ)。それとともに、無生物主語のものもある（13編、以下、非自称詞主語文と呼ぶ)。他に、不特定多数の読者に対する呼びかけの文が１編ある（以下、呼びかけ文と呼ぶ)。

まず、非自称詞主語文（13編）を分析してみる。以下、冒頭文を引用する場合、投稿者名・掲載日時は省略した。また、例文の引用順は、男女を問わず、投稿者の年齢の若い方から並べている。

① 私の将来の夢は、保育士になることです。

（「保育士になるためがんばる」　中学生・女　13）

② 今年１年は、いろいろな資格に挑戦した年でした。

（「漢検準１級に全力で挑んだ」　中学生・男　15）

③ 日本の食生活のスタイルが変化して、お米の消費は変化して、代わってパンの消費が増えています。

（「所得補償をしてでも米作守ろう」　公務員・男　31）

④ 不況が続く中、我が家の食生活にも悪影響が出始めています。

（「安い食品への疑惑発生に不安」　公務員・男　54）

⑤ 自民、公明両党は与党税制協議会を開き、2006年度税制改正大綱を発表しました。

（「相続税は100％に近い税率に」　会社員・男　56）

⑥ 今年は、デンマークの童話作家、アンデルセンの生誕200年の年で、全国で記念行事が開催されました。

（「奥深いアンデルセンの信仰」　主婦　60）

⑦ 昨年、娘が秋田県出身の彼と結婚したおかげで先日、親御さんからハタハタずしが送られてきました。

（「初めて口にしたハタハタずし」　主婦　62）

⑧ 労災補償が受けられない石綿（アスベスト）被害者を救済するため、被害救済法案の大綱が発表されました。

（「石綿救済は国　使用企業の責任」　会社員・女　63）

⑨　大手銀行が空前の利益を計上しています。

（「銀行は預金者に利益還元を」　会社員・女　65）

⑩　今年も暗いニュースの多い中、唯一明るいニュースは、日本中が喜びにわいた紀宮さまのご結婚でした。

（「唯一明るい　紀宮さまのご結婚」　主婦　67）

⑪　体力の衰えを感じながらも、病気もせず働くことができ、至福の１年でした。

（「絶賛されたクソ虫生息牧場」　酪農業・男　67）

⑫　世の３大職能（専門職により命の安全と権利を守る）として医師、弁護士、建築家（あるいは建築士）がありますが、世界中で日本ほど設計（建築家）に対して認識の低い国はありません。

（「建築家が毅然とした社会に」　建築家・男　70）

⑬　暗いニュースが多かった今年でしたが、明るくしてくれたのはスポーツの話題でした。

（「城島捕手の　この一瞬にホロリ」　無職・女　79）

以上、丁寧文体の非自称詞主語文のすべてである。

非自称詞主語文は、筆者が客観的な立場に立って事物・現象を捉え、それを表現している文であるが、これらの文には自分以外に話題主（話の主人公）が存することが多い。そこで、その主人公に注目して分析してみると、⑥「記念行事（アンデルセン）」、⑦「ハタハタずし（送り主）」、⑩「ニュース（紀宮さま）」、⑫「国（建築家）」、⑬「ニュース（城島捕手）」のそれぞれの人物は、筆者にとっては、敬意の対象であり、話題として取り上げることに対する畏怖の念が気持ちの中に当然あるものと推察される。因みに、普通文体で書かれた投稿文の中には、このような例はない。

同様のことは、例文①、③、④、⑤、⑧、⑨の話題（それぞれ「保育士」、「（農業）政策」、「景気不況」、「与党税制協議会」、「被害救済法案」、「大手

銀行」）についても言える。すなわち、話題として取り上げることによる、それにたずさわる人に対する畏怖の念である。

また、例文②、⑪については、どちらも今年は、自分にとって良い年であったことに対する感謝の気持ちが表明されている投稿文である。

ところで、例文⑩「・・・ご結婚でした」は、（「・・・ご結婚なさったことでした」に対する）尊敬表現とも考えられるが、その他の例（例文②、⑪を除く）も、敬語の分類から言えば、いわゆる「尊敬表現」と共通した面がある。

次に、自称詞主語文（18編）を分析してみる。

① 11月14日の本欄「コンビニの近くに目立つごみ」という投稿を読みました。

（「ごみの始末は自分の責任」　高校生・女　16）

② 私は先日、父から「ブロークン・ウインドー」の話を聞きました。

（「罪悪感の薄れを防ぎ　街を綺麗に」　高校生・女　18）

③ 3日の万能川柳「父の顔母の顔のまなざし両陛下」に、胸が熱くなりました。

（「両陛下をうたった万柳に感激」　主婦　58）

④ どうしてこんなに泣けるのでしょうか。

（「韓流に魅了されハングルに意欲」　主婦　62）

⑤ 以前、バスツアーで山口県の「ぼけ封じ観音」に行き、老僧のお話を聞きました。

（「老僧の「ぼけ防止十訓」」　無職・女　77）

これら①～⑤の自称詞主語文は、すべて話題が自分に感激・感動を与えてくれた対象（対象者）に対して、それぞれ①「投稿（投稿者）」、②「心理学理論（心理学者）」、③「川柳（作者）」、④「韓流ドラマ」、⑤「話

(老僧)」に対する感謝の気持ちが存するものと推察される。敬語の分類から言えば、いわゆる「謙譲表現」と共通する面がある。

それに対して、残りの13例は、次に示す例（自己紹介文）をはじめとして、すべて読者に対する配慮であると考えて良い（用例は省略する)。敬語の分類から言えば、いわゆる「丁寧表現」である。

⑥　私は北九州市消防局の救急隊員です。

（「救急に生きがいを感じた瞬間」　消防士・男　40）

最後に、呼びかけ文について分析してみる。

①　近所の空き地に地雷が埋まっている光景を想像したことがありますか。

（「地雷の看板のわきを走る少年」　大学生・女　21）

筆者は、不特定多数の読者に対して呼びかけているわけであるから、尊敬表現（たとえば、「・・・光景を想像なさったことがありますか」など）が想定されるところである。上記の非自称詞文⑩と共通した面がある。

6、効　　用

丁寧文体の効用の一つとして、敬語表現が簡潔になる場合があることを挙げておきたいと思う。例えば、

非自称詞主語文⑦

「・・・ハタハタずしが送られてきました」

←　「・・・ハタハタずしをお送り下さいました」

自称詞主語文①

「・・・投稿を読みました」

←　「・・・投稿を拝読致しました（お読み致しました)」

呼びかけ文①

「・・・光景を想像したことがありますか」

← 「・・・光景を想像なさったことがありますか」

などである。尚、前述「3、丁寧文体に対する意見」で取り上げた、諸氏の意見に従って、新聞の読者投稿文を検討してみたが、プラス面では当てはまるものはなかった。

6、まとめ

新聞の読者投稿文を資料にして、現代語の丁寧文体について分析した。その結果をまとめると、次のようになる。

（位　　相）

① 丁寧文体の主たる使用者は、年齢とは明確な相関関係は見られない。

② 丁寧文体の主たる使用者は、性別とは明確な相関関係は見られない。

（待　　遇）

② 丁寧文体を選択する理由としては、取り上げる話題主に対する尊敬の気持ちがある場合が考えられる。

③ 丁寧文体を選択する理由としては、取り上げる話題主に対する感謝の気持ちがある場合が考えられる。

④ 丁寧文体を選択する理由としては、取り上げる話題に対する畏怖の念がある場合が考えられる。

⑤ 丁寧文体を選択する理由としては、読者に対する配慮が考えられる。

（効　　用）

① 丁寧文体の効用については、敬語表現が簡潔になる場合がある。

＜資料＞

「毎日新聞」の「みんなの広場」(2005年12月掲載分　115編)

＜参考文献＞

金田一春彦「不変化助動詞の本質－主観的表現と客観的表現の別について－」(「国語国文」第22巻２・３号　1953年)

山下暁美「普通体と丁寧体について」(国際学友会日本語学校「紀要」12号　1987年)

山下暁美「文末におけるパターンについて」(国際学友会日本語学校「紀要」13号　1988年)

野元菊雄『広告に見る時代のことば大研究』(宣伝会議　1983年)

木村治美『エッセイを書きたいあなたに』(文芸春秋　1987年)

轡田隆史『うまい！と言われる文章の技術』(三笠書房　1998年)

村田喜代子『名文を書かない文章講座』(葦書房　2000年)

樋口裕一『人の心を動かす文章術』(草思社　2004年)